

令和2年度第1回岡山市総合教育会議

日時：令和2年5月13日（水）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時30分 開会

○司会 定刻となりましたので、ただいまから令和2年度第1回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は全員の出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 よろしいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 はい、じゃあお願いします。

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者であります市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしくお願ひいたします。

○市長 はい。それでは、次第に沿って議事を進めていきます。

「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」を目標に掲げ、取り組んでまいりました現教育大綱も最終年度を迎えました。次期大綱に向け、子どもたちのよりよい成長のためにどうしていくのがいいのか、何が最もふさわしいのか、ここで1年をかけて議論を進めていきたいというように思います。本日は、「未来を担う子どもたちへの教育について」と題し、教育委員会、学校が今後注力すべきことについて議論していきたいと思ひます。

また、岡山市中学校長会の門田会長、また岡山市小学校長会の清廣会長にもご出席をいただいております。この会議の議論に入っただき、学校現場における取組、ご提案など、幅広いご意見をいただければと思ひます。両会長には今回初めてのご出席ということで、まずは自己紹介をお願いしたいと思ひます。門田会長、お願ひいたします。

○門田中学校長会長 こんにちは。岡山市の中学校長会の会長をさせてもらっています、岡輝中学校の門田といいます。よろしくお願ひします。

まず、最近の子どもたちの様子を少し話をさせていただきたいと思います。

休校中それから自粛ということで、中学生がこの間、家でまずはおとなしく本当に子どもたちが家で過ごしたというのが伺えます。地域からの苦情とか、そんなものも一切ありませんし、改めて登校日に担任の先生が家でどんなことをしていたということを尋ねて、いろんなことを答えて、それを学級通信で担任の先生が渡すということで、それぞれ苦ししながらも家での生活があったようです。

中でも、まず始業式と入学式が今年度できたということ、これはよかったと思います。東京などでできてないところは担任の先生が誰かも分からない、クラスの子どももということ、一つにはもうはっきりしていますから、担任の先生も自分のクラスの子どもということ連絡が取れたりしています。

そんな中で、いよいよ登校日それから学校生活もしばらくスタートしています。さすがに子どもたちは喜んで学校に来ました。密はいけないぞと言いながらも本当にじゃれ合うような形で、本当に学校というのはやはり子どもたちの成長にとっては大切な場なんだというのを改めて思っています。

そんな中で、これはまた次回の会でも話をさせてもらおうと思いますが、不登校だった生徒、この子どもたちの中の何人かですが、再開になって無遅刻無欠席で来ている子どもたちがいます。ちょっとこの先もこの子どもたちの様子を見ていきたいと思いますが、今まで学校って4時間、午前中あって、給食を食べて、休憩時間があって、昼から5、6校時をして、掃除をして、そうして帰りの会をして帰っていくというのが、とりあえず午前中の授業、さよならがあってということで段階的にスタートしている、そのことなんか影響しているのかなとも思っています。

ということで、子どもたちは元気に、ただ、まだ部活動も再開していない中で元気にやっています。今週の月曜日、スケジュールを話したら、いよいよ28日から部活ができるんだということで子どもたちは喜んでいました。

次に教員のほうですが、本当に先生方は一生懸命されています。例えば、登校日の前には本校ではグラウンドに巨大アートではないですけど、子どもたちへのメッセージをつくらうということで若い先生がグラウンドに大きなメッセージを書く、それから今日も午前中から先生方が集まって何かやっていましたが、校舎中にいろんな張り紙をして子どもたちに頑張ってもらおうとメッセージを送っているということで、教員一同、子どもたちとの再会、迎える準備を現在しているところです。

今日はしばらくですけど、よろしく申し上げます。

○市長 はい、ありがとうございました。

では、清廣会長、お願いいたします。

○清廣小学校長会長 はい、失礼します。今年度の岡山市小学校長会会長の清廣玲子と申します。三勲小学校に勤務して5年目になります。本日はこのような会議に出席させていただきまして、本当にありがとうございます。

学校のほうは休校が続いていますが、先ほどと同じように一昨日、11日は登校日で久しぶりに子どもたちが学校にやってきました。マスクを付けていましたけれども、とってもうれしそうな感じで校門に入ってきました。友達とも余り近づかないようにというように言っているんですけども、久しぶりに会えてうれしいなというのがひしひしと伝わってきました。また、1年生を中心に学校に送ってこられた保護者の方も何人もおられましたけれども、様子を見てみると安心して学校に預けてくださっているというようなことを感じました。

教室では、担任が子どもたちに休みの間どのように過ごしていたかなというようなことを尋ねたり、それから家庭での学習を確認したりしていました。それから、またお休みがありますので、これからどういうことに気をつけて過ごしたらいいか、それからどんな勉強をしたらいいかというようなことについても丁寧に話をしていました。子どもたちは教室いっぱい広がって、なるべく隣の机の距離を離して座っていましたけれども、一生懸命話を聞いたり、それからたくさん配られた学習プリントを一生懸命見たりしていました。その姿を見て、学校というところはやはり子どもたちにとって大切な場所なんだなということを強く思いました。

家庭学習については、オンラインの学習システムが新たに導入されました。勉強したいところが探しやすくなっていて、学習内容の説明とか練習問題がとてたくさん載っていました。教員がその子どもたちの使用状況や成果を確認することができるというのも、とても私はいいなと思っています。配布した日のお昼過ぎに私も早速開けてみたんですけども、もう使用している子どもたちが何人もいました。昨日の朝とそれから今日と、どんどん活用している子どもたちが増えていまして、意欲的に取り組んでいるんだなということを感じています。学校で授業ができないということで始められたわけですけども、これをきっかけにして子どもたちがこういったインターネットを活用して意欲を持って学習したりとか、それから自分で計画的に学習を進めたり、そういったような力も付いてくる

のではないかなということを感じているところです。

大変な状況ではありますけれども、皆様方にいろいろご指導いただいて、子どもたちのために頑張っていかななくてはいけないなと思っています。今日はどうぞよろしくお願いたします。

○市長 ありがとうございます。

これから議事に入っていきますが、その前に両校長会の会長さんに今新型コロナウイルスの関係で休校中の子どもたちの様子などについてお話をいただきましたが、何かご質問などありましたらお願いをいたします。

じゃあ、私からいいですか。門田さんの話で少し分からなかったのは、不登校の子が通常と違う学校生活になって、それがかえってプラスになっている面もあるんじゃないかというようにお話をされましたよね。どういう意味なのでしょう。

○門田中学校長会長 はっきり分かりませんが、不登校のどこかに人との関わりが関わりづらいという要素を持っています。それが1日、本当に朝8時半から4時ぐらいまで縛られるのと、これは今現在でしたらもう午前中だけだと。午前中4時間、例えば給食もない、それで帰れるというのとで違うのかなという感じがしています。例えば、保健室登校の子がいますが、段階的にすることによって学校に来れるんじゃないかという見通しもできつつあるのかなというように見えています。

○市長 端的に言うと、午前中だけだと接触が余り得意じゃない子も最初のうち我慢していく。それがだんだんと慣れてくるにしたがって、これから1日間の登校というのもできるのではないかと、そんなイメージでしょうか。

○門田中学校長会長 そういうように見えています。

○市長 はい、ありがとうございます。

それからあと、私、清廣さんにお伺いしたいのは、オンライン教育というのは本来は今回のような休校のとき用では必ずしもないということで、今それが機能しているというのは非常にありがたいことだと思うんですけど、これをきっかけとして、このオンライン教育の幅を広げていきたいというようなイメージを少しおっしゃられましたけど、具体的にはどんなイメージをお持ちなんでしょうか。

○清廣小学校長会長 今までそういったようなものは活用したことが余りなかった子どもたちもそれぞれ活用するようになってきますと、あっ、こういうことで自分なりに学習を進めることができるんだなということを感じた子どもたちがいるので、このときだけじゃ

なくて、こういったことを例えば授業の中で取り入れるだとか家庭学習に生かすだとか、そういったようなことも今後できてくるのではないかなということ、まだ配られたばかりなので、私も中をたくさん見たわけじゃないんですけども、少し感じたところです。

○市長 また、しばらくして、そういうのが落ちついてきたら、オンライン教育のプラス面、マイナス面を教えていただければというように思います。

ほかによろしいでしょうか。あと、何かあれば。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 じゃあ、あとは議事の中で今も含めて、またご質問をいただければというように思います。

今日は、昨年度に引き続き、ベネッセコーポレーションの西島さんに参加いただいております。

それでは、議事を進めさせていただきます。

まずは、協議事項の「未来を担う子どもたちへの教育」について、資料について教育長から説明をお願いいたします。

○教育長 失礼いたします。「未来を担う子どもたちへの教育」、これをテーマにさせていただきます。本当にありがとうございます。

現在、岡山市立学校では政府の緊急事態宣言を受け、コロナウイルス感染症防止のため、4月21日から5月20日までを目途に臨時休校としております。新年度、4月7日から4月20日の2週間ではありますが、子どもたちを学校で迎え、大きな不安を抱えつつも感染防止の取組を徹底し、子どもたちとの人間関係づくり、またその様子の把握に努めることができました。この2週間は貴重な時間であったと思います。

臨時休校をしている期間におきまして、学力保障、健康や生活面の配慮等が必要でありましたが、家庭学習のプリント配布や動画の配信、健康観察記録簿や運動取組カードの配布など、教育委員会として総力を結集して取組を進めてきました。学校再開の際には、休校中の学習や健康状況の把握、3密を防ぐなど、感染防止の取組を継続するとともに、不当な差別や偏見、いじめ防止の徹底も進めてまいります。

また、今後授業時間の確保のために夏季休業中をどういう扱いにしていくかということも検討しているところであります。未来を担う子どもたちがこうした先の見えない状況にあっても、自分で考え、行動し、周りとの関係を適切に築いていけるよう取り組んでまいりたいと考えております。

それでは、「これからの岡山市の学校のあるべき姿 一次期の教育大綱に向けて」という資料1をご覧ください。

現在の大綱では、「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」を大きな目標として掲げ、取り組んでまいりました。

学力の向上につきましては、授業改善が定着したことや家庭学習が活発化したことから、目標にほぼ到達していると考えております。今後はこれまでの取組を継続しつつ、さらなる向上を図ってまいりたいと思います。

問題行動等の防止及び解決につきましては、小学校の暴力行為は減少したものの、目標にはまだまだ到達していないということがございます。不登校児童が増加するなど、特に不登校については非常に大きな課題と捉えており、早期対応等の取組を進めてまいり所存です。詳しくは資料2のところで説明いたします。

また、これからの時代に求められる資質・能力に関しまして、特に英語教育や情報教育に力を入れてまいりたいと考えており、これにつきましても詳しくは資料3、4でそれぞれ説明してまいります。

これからの岡山市の学校は、全校での徹底、教員の力量を重視、保・幼・小・中の連携、家庭・地域との連携をさらに進めることによって掲げる目標の達成を図ってまいりたいと考えております。

続いて、資料2、「これからの岡山市の学校教育について」をご覧ください。

変化の激しい時代を生きる子どもたちの育成ということで、そのために現行の岡山市教育大綱の目標である「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」について、より焦点化することが大切だと考えました。

さらなる学力の向上につきましては、全国学力・学習状況調査の偏差値を小・中ともに51以上を目指します。具体策としましては、これまでめあてとまとめを明確にした授業づくりを進めてきており、これを今後も継続するとともに、自分で考え、表現する力の向上を目指し、児童・生徒が意見を交流する活動を取り入れた授業づくりを教員が進めるといふ取組を行います。

いじめや暴力行為等につきましては、これまで同様に毅然とした態度でしっかりと取り組みます。そして、不登校の未然防止について、新規不登校児童・生徒の出現率の低下、これを重視し、現在0.74%の出現率を学校1校当たり1人減らすという計算で0.47%以下を目指してまいります。具体的には、学校は個々の実態をしっかりと把握し、連続欠席3

日で家庭訪問をしたり、長期にわたる場合は支援計画を作成したりするなど、取組を行ってまいります。

続いて、資料3「英語教育の推進について」をご覧ください。

現在、推進モデル校による公開授業を行ったり全校にALTを派遣したりすることによって英語教育の推進を図っております。子どもの英語力につきましては、全国平均には至っていないという課題がございます。英検3級以上相当の英語力を備えた子どもを50%以上にすることと、全国学力・学習状況調査の英語の偏差値を50以上にすることを目標としました。英語の教員が半分以上英語を使った活動を行う授業を増やしたり、英会話を中心とした研修機会を設けて教員の英語力の向上を図ったりすることで、その達成を目指してまいりたいと考えています。

指標としましては、中学校段階のものではありますが、小学校の段階からよりよい授業の積み重ねにより、児童・生徒の英語に係る力を伸ばしていく必要があると思っております。そのため、具体策としましては、小・中学校おのおのの英語担当教員は年に2回、異校種の英語の授業を見に行く取組などを行います。例えば、中学校での子どもの姿を知ることによって小学校の授業改善に生かすことができるようにしたいと思っております。

最後に、資料4、「教育の情報化について」をご覧ください。

現在、「岡山市立学校における情報化基本指針」を策定し、1人1台、タブレットの整備を進めております。児童・生徒や教員が十分に活用できないということが課題であります。児童・生徒がICTを積極的に活用することと教員もICTを活用して授業できることを目標とし、どちらも100%を目指してまいります。

具体策としては、教員が積極的にタブレットなどのICTを活用し、児童・生徒がそれを効果的に使って、自分の考えをまとめたり伝えたりしながら主体的に学習することができる、そうした授業づくりを進める取組などを行います。

説明は以上でございます。

○市長 では続きまして、西島さんから資料5の説明をお願いいたします。

○西島 はい、失礼いたします。ベネッセコーポレーションの西島でございます。

まずは、このコロナの対応で、市長を始め、市役所の皆様、教育長を始め、教育委員会の皆様、校長先生方を始め、教職員の皆様、本当に日々大変なことと存じます。岡山市民を代表する立場にはございませんが、子どもたちが岡山市の小・中学校を卒業させていただきましたので、元保護者として厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、今日は大綱の改定というところに向かっての基礎的なところをもう一度振り返ろうということで資料を用意するようにというように承りまして、もう過去にも扱ったことがございますが、学習指導要領の改訂を取り巻く、あるいは教育改革全体を取り巻く背景のところをまずまとめてきております。また、そこにつながりまして、先生方がこれからどのような資質・能力を向上させていかなければならないかというところで2つ目の項目としてまとめております。

では、1枚めくっていただきまして、1番のところですが、細かくは触れませんが、学習指導要領の改訂の方向性ということで、1枚絵として全体像が分かるものがこちらになるかなと思います。

何ができるようになるかということをしっかり見極めながら、どのように学ぶかというところまで踏み込んだ学習指導要領になって、主体的な学び、対話的な学び、深い学びというところが具体化されております。また、「社会に開かれた教育課程」ということで真ん中にありますが、社会と学校教育のつながりというところをもっともっと明確にしていこうというようなところが趣旨になっております。こういった全体像の中で今小学校のほうで全面実施、来年度に中学校で全面実施というようになりますが、こういった考え方が出てきた背景というところで、この後、幾つかご紹介をさせていただきます。

では、めくっていただきまして、3番のシートになります。

私たち昭和の世代は2000年になった、20世紀から21世紀になった瞬間を経験をしているわけですが、今の子どもたちは22世紀を経験することになる、大半の方が22世紀を経験することになるのではないかなというように思います。小学校1年生の方が86歳で2100年を迎えるという形になります。その間、さまざまな予測が今出て、ここにも書いておりますけれども、大きな流れとしてはやはりグローバル化というところ、それからITというところ、このあたりで世界の構造が変わっていくというように言われております。

とはいえ、教育そのものの存在意義といいますか、意義は昔から変わらず、今まだ見えない未来社会を構築していく子どもたちが力をしっかり付けていくというのが不易としての教育、そして今見えている、例えばグローバル、ITというところ、そういったところの流行というように言われるところの力を付けていくと。この両面を持って教育をしていこうというのがよく言われるところでございます。

流行という言葉が一般的に使うものと少し違いますが、吹き出しを付けておりますが、時代の変化とともに変えていく必要があるものというように言われております。こういっ

た不易と流行という観点で、本当にいつでも使える力をしっかり付けていこうということ
と今必要な力、もうこれはこの後必ず必要になる力を付けていこうということで、教育改
革の根本というところが考えられているところになります。

この後は流行に関してになりますが、外国人とともに働く社会ということで、次のペー
ジ、もうご承知のことばかりだと思います。在留外国人数、あるいは日本の企業が海外に
拠点を持つ数、さまざま増えていっている状況、また次のページになりますが、一方で日
本におけるグローバル人材は企業のニーズを満たせていないという状況です。

左側は海外事業に必要なだというような人材を確保できているかどうかというので、ほぼ
不足している状況にあります。一方で、若者たちは海外で働きたいというように思う人た
ちはだんだん減っていっているという傾向があるということが言われております。なか
なかグローバルで活躍しようという意欲のある若者たちを育て切れていないというのが現状
のようです。

一方で、今度は外国人が日本で国内で働くということを考えてみても、このコロナにお
いてさまざまな変化が起こるかもしれませんが、ここまでのところはずっと増えてきてい
るのが6ページのところになります。

また、次のページ、外国人留学生も国内にたくさん来てくれている状況があります。

ところが、一方で8ページにありますように日本人が海外に留学をするというのは
2004年をピークにだんだん下がってきている。最近ちょっと盛り返し始めているんですけ
れども、景気の低迷も途中であって、なかなか増えていっていないという状況で、海外か
ら日本に入ってくる留学生は多いんですが、日本から海外に行つてグローバルに活躍しよ
うという力強い気持ちを持った若者たちは減っているんじゃないかというように言われて
います。

国のほうの施策としては、9ページにあります、海外留学を文部科学省としても促進
をしていこうということで、「トビタテ！留学JAPAN」というような促進事業をやつ
たりされております。

また、この左下の図になりますが、近畿大学さんの国際学部のページを持ってきていま
すが、国際学部に入學すると全員が1年間、海外に留学する、あるいは右側のほう武蔵野
大学さんも全員が5カ月間、海外に留学するというので、大学の学部を挙げて全員が留
学するようところが最近増えてきております。若者たちの海外志向といえますか、グロ
ーバル志向を高めていこうという施策は少しずつ広がっているところになります。

次に、ITに関してですが、次のページ、10ページ、これはもう皆様よくご承知のことだと思います。よく言われることですが、あと20年後、10から20年後ではもう今ある仕事は人工知能やロボットに半分ぐらいが代替されてしまうと。あるいは、今の子どもたちはこれからこれまでに存在しなかった職業に将来就いていくだろうということが言われています。もうまさに何ができるようになればいいのかということが不透明なまま学んでいかなきゃいけないということですが、間違いなくITに関しては、これからどんどん広がっていくというように思われます。そういった産業構造も見据えながら、どういう力を付けていかなきゃいけないかということを教育の中でも考えていかなければならないということで教育改革というものが言われてきております。

ITに関しては、次のページ、11ページですが、国際競争全体の中で日本は非常に今弱い状況にあります。物づくりということで国が栄えてきている状況だと思いますが、ITの中ではなかなか競争力を発揮できていないと。日本でITということでいうと、左下に幾つかの会社さんを挙げておりますけれども、こういった企業があります。相当大きいなというように思えるNTTさんでも12兆円の売り上げなんです、上にあります会社、15兆円、29兆円、26兆円と非常にもうその倍以上を売り上げている会社さんもたくさんあると。一方、中華人民共和国のほうでも、これはBATHTと言うらしいんですけども、こちらの4社がもう本当に世界的に活躍をされて、かなり大きくなっているという状況にあります。そこに日本がどう立ち向かっていくのかということが今は描けていないという非常に不安な状況にあるというところだと思っています。

こういった状況を踏まえて、12ページにありますように、教育再生実行会議ということで、ここに挙げましたのは第七次提言ですが、これからの時代を生きる人たちに必要とされる資質・能力ということで、こういった左下に書いておりますような資質・能力が必要だという提言がなされています。こういったものを踏まえて、「思考力・判断力・表現力」というような言い方になってますけれども、この裏にこういった力を付けていこうという教育に変えていきたいということが国の提言ということになっております。

その後、平成30年に、次の13ページなんです、Society 5.0というものが打ち出されています。これは本当にさまざまな国の施策、政策の基礎になる考え方としてSociety 5.0というものが出されているんですが、5.0の意味は左にありますように狩猟、農耕、工業、情報と、次は超スマート社会ということで5.0というふうに言われております。その社会の中ではIoTですとか人工知能、こういったものがさまざま広がって

使われていて、人間がその中でどう生きていくのかということを考えなければならないということが言われています。

しかしながら、こういったI o TやA Iを活用した、右上の絵にあるような、さまざまな社会というところは希望の持てる社会であり、世代を超えて互いに尊重し合える社会であり、一人一人が快適で活躍できる社会であると。そう定義をして、そういう社会になるように何をしていかなければならないのかということ提言しているのがS o c i e t y 5.0ということになります。

次の14ページですが、ここからは教育に関することということで、S o c i e t y 5.0を実現するための最大の課題はデータサイエンティストが不足しているということです。A Iがさまざまに活用されている状況が散見されるんですけども、まだまだ高度なA Iに関する知識、技術を持つ人材は日本では不足しているというように言われています。先ほどありましたように、どうしても海外に先を越されているという状況があるようです。このA Iの技術の根幹をなす数学、情報科学、統計学、こういったものをもっともっと広げていかなければならないということが言われています。あわせて共通して求められる力、読み解き、対話、科学的思考、あるいは社会を牽引するという人材、創造的な人材、革新できる人材、そういった人たちも求められるというように言われており、これらを統合して最近では大学ではデータサイエンス学部というものがかなり多くの大学で新規に設置をされるようになってきております。

今のは大学の話になりますが、15ページになりまして、S o c i e t y 5.0の文章の中では、小・中学校での学びについても提言がなされております。

まず、義務教育においては、学びの基盤を固めて、読解力の課題、学力格差の問題の解決をしようということが言われております。読解力がさまざまな数学的思考力や情報活用能力のベースにもなってきますので、その課題をしっかりと解決をし、学力格差をなくしていこうということが大きな目標として掲げられております。それがあつての我が国の産業の品質やサービスがあるんだというような形になっております。

また、次の16ページですけども、今度は学校あるいは先生というようなところも観点に踏まえたときに、学校のあり方、学びのあり方を変えていこうというようなことの提言があります。

今はこのS o c i e t y 5.0の中では今の学校は一元モデルの学校であるというように言われています。先生方が教職員として学校を経営をされている。でも、これから必要な

のは、チーム学校としてさまざまな方たちとの共同経営というところ、あるいは先生だけの指導から開かれた教育課程による、さまざまな協働の中での指導、それから同一内容だけ児童に教える、答えが決まっていることをみんなに教えるということではなくて、一人一人の特性に応じた教育のあり方というのを考えていこう、紙だけではなくてICT、それから教え導く先生に加えて学びの支援者という先生ということで、これまでのあり方から学校のあり方も変えていきたいと思いますということが言われております。

次の17ページですけれども、ここでは小・中学校、高等学校、高等教育というところで、学びの変革のキーワードを整理をしております。

小・中学校のところで行きますと、異年齢・異学年など多様な協働学習、専科の教員の配置、特に英語や理科教育等、さらに強化をしていかなければならないところの専科教員の配置ということが言われております。それから、新指導要領の確実な習得、教員免許制度の改善、情報活用能力の習得、データ・サイエンス、STEAM、それからデザイン思考と、こういったことが書かれておりますが、前提となる基盤として下に5つ掲げておりますけれども、こういったものを整備をしながら学校教育のあり方を変えていこうというようなことが言われております。

少し丸を付けておりましたが、STEAM教育というのは次のページに少しピックアップをして書いております。

これはSTEMと昔は言われておりましたが、Science、Technology、Engineering、Mathematicsの4つでSTEMと言っていたんですが、Artが加わって、芸術的な表現力というところも加わって、STEAMというように最近では言われています。STEAM教育でプログラミングということを取り上げることが多いんですけれども、そこだけではなくて、Artも含めたさまざまな、どちらかというと理系の教育に芸術を加えたところ、そこをさらに教科横断的な教育で高めていかなきゃいけないというように言われています。

1つ、岐阜市さんの例がありましたので、持ってきております。「ぎふっ子からノーベル賞を！」ということ掲げて、元理科の先生、退職された先生や理科の素養を持たれている方を各学校に派遣をして理科教育を強化していこうということで、さまざまな取組をされているということでございましたので、事例を持ってまいっております。

ここまでのところを少しまとめまして、19ページになります。

予測し得ない社会の変化もありますし、ICT、グローバルというように見えていると

ころもあります。これらを踏まえて、さらに不易というようにしてきたところもさらに進化をさせるために、資質・能力という言葉でどういう力をつけるのかということを確認していきましょうということですとか、学力の三要素ということで主体的な学びですとか思考力・判断力・表現力、それから知識・技能というところで学力の三要素も明確にして育成をしていこうということで掲げられているのが今の教育改革の根本になるということになります。

続きまして、そういった教育を目指す中で先生方の資質・能力をどのようにしていったらいいのかということで次のページからになります。

21ページになりますが、これからの学校教育を担う教員の資質・能力の向上についてということで中教審の答申があったんですけれども、その中で書かれていたのが社会に開かれた教育課程という言葉の意味をしっかりと捉えようということです。何を知っているかということ育てることも必要ですけれども、その知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送れるようになるのかということ、そういった力を子どもたちに身に付けさせなければいけないということで、社会と学校教育のあり方、そこをどうつなげていくかということが必要とされているということになります。

下に書いておりますけれども、指導によって育まれる思考力、判断力、表現力等を自覚的に認識すると。どういう力が必要かということ先生方自身がどういう力ということ思考力、判断力、表現力の中身、先ほど教育実行再生会議の中で提言された裏にある力ということがありましたけれども、ああいった形でどういう力を付けていくのかということ教科学習の中で明確にしていくということが必要かと思えます。

また、アクティブラーニングに引っ張られ過ぎずに子どもたちの変化を見ながら指導改善をしていける力ですとか、あるいはもう一人でやれることというのは本当に限られております。社会とつながるという意味では先生個人でできることというのは非常に小さいです。チーム学校という中で先生個人としてできないことを知って、できないことをちゃんと協力を得てチームで動かせるというような力、そういったものが必要になるというように言われております。

そういったさまざまな新しい力が必要な状況の中で、次の22ページはこれはちょっと古いデータになりますが、日本の先生方はお忙しいです。なかなか研修のための時間がない、あるいは環境が整っていないということが言われております。働き方改革ということも言われておりますが、そういった中でeラーニングの可能性があるのでないかと

いうことで次のページに事例を持ってきております。

これは福井県でやられているものですが、相当eラーニングを充実させて教員研修をやっというこことでやられています。右下に図がありますが、当然eラーニングでできること、通信型研修でできることと、そうじゃないことというのはたくさんあります。明確に分けなければならないので、通信型研修でやれること、それで効果が出ることをピックアップをして今裏に書いてあるようなメニューをずらっとつくっていらっします。これを県で用意をして、県下の先生方がこれをもって研修を受けるという形を取られています。

次に、指導の中身ですけれども、24ページにあるのは少し古い2016年の調査になりますが、新しい指導要領になる前から先生方の意識というのはもう変わってきているというのをお分かりいただけるかと思ひます。

顕著なのが、例えば右下、オレンジ色が小学校、赤が中学校になりますが、計算や漢字などの反復的な練習は相当もう既に減っています。そのかわりに真ん中、やや左下にありますグループ活動を取り入れた授業、この事例がどんどん増えていると。先ほどICTの活用についてのお話がありましたが、計算や漢字などの反復的な練習はICTで個人の学習に任せつつ、学校では授業では先生方と生徒が一緒にいることによって成立をするグループ活動ということの充実を図ることがもう既に行われているというように見えるかと思ひます。

その中で、協働的な学習をする中で、あるいは協働的な学習だけではないですが、生徒たちが学習する中でどんな力を付けるのかということ25番のページになります。

思考力・判断力ということが、表現力ということが言われますが、なかなか児童・生徒には思考力・判断力という言葉が伝わりにくいと思ひます。これは熊本大学の附属中学校さんの例なんですけれども、子どもたちとともに、例えば比較、分類、あるいは統合、批判、こういった言葉で考える力というものを整理をし直したものを共有をして、今はどんな考え方をしたというような問いかけの中で、「これは具体化だ」ですとか、「これは比較だ」ですとか、そういったことを子どもたちとともに授業の中で話をしていくというような授業の仕方をされています。

このように単に思考力・判断力という言葉ではなく、どんな力なんだと、今君が使ったのはどんな力だということ自覚的に学んでいけるような取組というのはすごく効果があることではないかというように思ひます。こういった指導の方法というのは、まだまだ開

発途中だと思いますけれども、こういった指導のやり方ということをもだまだ研究をしていかなきゃいけないというところだと思います。

次の英語に関しては、これは国のデータですけれども、先生方の英検の取得状況ということで、中学校の先生で英検準1級を取りましようというような働きかけがありますが、3割程度しか取れていないというようなところなんです。それから、生徒についても、まだまだ目標には到達していないというところになります。

次のページはICT教育ということで、先ほどの問題を解くようなICTのお話もありましたが、そうではなくて、協働学習でいかにICTを活用していくかということもまだまだ先生方は不慣れなところがあるのが一般的な状況かなというように思います。アクティブラーニングの中でICTを使って子どもたちがさまざまな意見交換ができる、あるいはいろんな考えたことを集約しながら授業を進めることができるということのスキル、そのあたりを身に付けていかなきゃいけないという状況にあるのかなというように思います。ドリル的な問題を解くのは子どもたち自身が進んでやっていけると思うんですが、こういったことは先生方のファシリテーションのもとに成立するというように思います。

そのファシリテーション力というところでいきますと、次の28ページですが、これもTALISの調査で少し古いんですけれども、日本の先生方はなかなか教えるという技術では高いと思うんですけれども、手助けをすとか動機付けをすとか自信を持たせる、批判的思考を促すと、そういったところで苦手意識をお持ちのようです。これからは答えが一つに決まらない課題を子どもたちが考えることで力を付けていくということが大事になってくると思います。教えるではなくて、ファシリテートすると。人々の活動が容易にできるように支援をすというような、かじ取りをすスキルというものが求められているというように言われています。

最後のページでまとめておりますが、こちらも不易と流行ということていきますと、不易のところではこれまでも当然社会と教育の関係というのはあったわけですけれども、そこをさらにつながりをしっかり明確にしていくということが1つ、それから先ほどありましたように資質・能力あるいは思考力・判断力とありますが、じゃあそれは何なんだということ子どもたちとしっかり共有できるように可視化・意識化するということが、そしてファシリテーション力というものがこれからも必要ですし、強化をしていかなきゃいけないというところだと思います。

また、ICT、グローバルのところは、ICTを使った指導スキルとか小学校の指導体

制、1人の先生でやるということではなくて、さまざまな方の力を借りながらの指導体制、それから中学校の先生の英語力といったあたりをいかに働き方改革ということと両立をさせながら育成していくかということが大事になるというように思っております。

以上でございます。

○市長 はい、ありがとうございました。

まず、教育長から次期の教育大綱に向けてという説明をいただきました。実は3年前に教育大綱をつくり上げて、私の感じでありますけれども、教育委員会、教育長ほか、教育委員会メンバーと学校側が一体となって取り組んでいただき、大きな成果を上げていただいたのではないかとまずは思っているところであります。関係者の皆様方、本当にありがとうございました。

次に、どういう目標を掲げ、我々が子どもたちの成長に寄与していくかということでありまして、とりあえずは前回の学力そして問題行動という2点に関して、私も入らせてもらって教育委員会と議論して、こういうペーパーをつくったわけでありまして。これについて一つの学力、問題行動という議論の中でどう考えていくのか。そして、先ほど西島さんもお話いただいた、これから社会がこういうように変化していきだろ、こういう中で我々としてももう少し横に広げるやり方が学力、問題行動以外、何を中心といいますか、力点を置いてこれからやっていく必要があるのか。そういったこと、特にこの新型コロナウイルスの関係、数年間、またいろいろと生活も変わってくるかもしれません。社会環境も変わってくるかもしれません。そういうのを踏まえながら、どう対応していくのがいいんだろうかということ議論して、一つの目標を定め、教育の柱として置いていくものをつくりたいというように思っているところであります。

まずは、西島さんのお話なども頭の中に入れていただいて、教育長がお話いただいた、このあるべき姿について、まず現場といいますか、校長会の会長さん、お二人からお話をいただき、そして教育委員の皆さん方から1人ずつお話をいただくと、こういう順番でやらせていただきたいと思います。その際は西島さん、教育長も議論に参加していただければというように思うところであります。

まず、中学校長会の門田さんからお話をお願いいたします。

○門田中学校長会長 はい。まず、学力向上に関してですが、この3年間の成果は中学校で特に現れたと思います。まず、校長会でも確認をしながら年度当初に各学校で授業改善、特に授業改善を心がけよう、校長は必ず授業を見に行こうということで取組を進めま

した。その結果、特に中学校で授業改善が行われたのではないかと思います。これは決して小学校よりも中学校がという意味ではなくて、小学校の体制にやっと中学校が追いついてきたと言えるかもしれません。

どちらかといえば、中学校というのは教科担任で、学校としての授業改善を図る研究体制というのは余り優れていなかった。それが、例えば学プロ（子どもが輝く学びづくりプロジェクト）などの導入もしてくださった。そうやって学校を挙げて、学校の中で授業について話し合うとかお互いに見合うというのがこの数年でもうはるかに進んだのではないかと感じています。これはもう各学校、実感として校長会の中でもよく話に出るところです。ですから、校長が授業を見に行き指導したり、いろんな授業について話し合う、子どもたちの学びについて教員とともに話をするという体制が大きく変わったような気がします。これはもう本当に中学校の大きな進歩と言えるような気がします。

もともと教科担任で、なかなか中学校の教員は教科を越えて言わなかったんです。私は数学は専門じゃないから、国語は専門じゃないからということで言わなかったのが、子どもの学びを中心にしたということで、かなり教員同士の連携が増えていると。ちなみに本校はやっと6月から研究授業を開始しますが、ふだんの1週間の中で、例えば私、校長はフルに授業を4時間は見ます。それぞれの学年それから特別支援、もうこれは1人2回以上は公開しようということで、1週間のうち4時間をフルに見る。さらにどんどん回って見ますから、教員もお互いにもう今本当にオープンになっています。教室を閉め切って自分の授業を見てもらいたくないという教員はおりませんから、オープンな形でお互いが参考になるようなということで改善をされていったと思います。さらに、これは力を入れて、英語なんかも入ってきます。これからさらに中学校はここに力を入れていけば、必ず力は付いてくるというように思っています。

それから、問題行動、不登校、特に不登校に関しては、これは中学校のほうでも大きな課題です。非常に大きな課題で、なかなか学校だけではどうにもなりません。ということで、スクールカウンセラーさん、それから教育相談の人、こういった福祉の関係の方と連携をすること、それから小・中が連携すること、こういったことで今までどおりやっていたところなんです。特に小・中の連携というのは、小・中、それから保・幼も含めてです。不登校の生徒の中には兄弟関係も含めて不登校の子がいます。ですから、よく中学校でやるのは、中学生が来てない。すぐ小学校に連絡して、小学校の妹さん、弟さんは来るかなということで情報をもらおう。それから、保育園や幼稚園に連絡をして、ここは親が

連れてきますから、お母さん来たということで、この連携はやはり大事で非常に大切なものです。

ただ、今は本当にこのコロナの関係で子どもの姿が見えないので、虐待等も含めて、なかなか察することができないんですけど、小・中、中学校区の連携を保つこと、それから福祉の力を借りること、こういったことで不登校は幾らか改善されるんじゃないかという気はしています。

それから、問題行動、これは授業改善と同じだと思います。学校を子どもたちにとって居場所のある場所にする。子どもたちの人間関係をよりよい人間関係にするために、学校は楽しいんだと、学校が居場所なんだという居場所をつくってやるということが今までも求められてきましたし、これから先も学校はやはり大切です。改めて今回休校になってみて、本当に思います、学校というのはいいところなんだと。子どもたちがつながっていく、それは学びを通してつながること、人間関係を通して子どもたちがつながること、このことが学力向上も不登校も解決する最大のところじゃないかという気がしています。

はい、大体以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

じゃあ、清廣さん、お願いいたします。

○清廣小学校長会長 はい。小学校においても授業改善がこの3年間で大分進んできたように思っています。このように改善された理由としては、いろんなことがあると思うんですけども、子どもたち自身が1時間の授業のめあてをつくったりとかまとめたり、それから話し合い活動が充実してきて、自分の考えを言葉で伝えたり友達の考えを聞いて自分の考えと比べたり、そういったようなことが大分できてきました。それから、家庭と連携して家庭学習についても子どもたちが進んで取り組めるようにしてきたというようなことが挙げられるのではないかなということを思っています。

教育委員会のほうからの「授業これだけは」とか、それから「家庭学習これだけは」というのがとても分かりやすいものが出ていますけれども、このことが岡山市全体で取り組んでいくというようなこととして示されたということも、とても効果的だったなと思っています。

今後、例えばより授業改善を進めるためにどうしたらいいかということですけども、例えば学力の分布を見たときに少し気になるのは、なかなか学力が定着していない子どもがいるというようなことがやはり気になっています。分布でいったら底辺のほうの子ども

たちをいかに引き上げるかというようなことが大事になってくると思います。視覚に訴えるとか、そういった分かりやすい授業づくりがもちろん大切なんですけれども、小学校の授業、45分の中で学習内容が理解できているかどうかとか個別に関わる時間、個の学習の定着度をしっかり見たり、定着してなかったらその45分の中で間違いを見つけて指導すると、そういったような時間をとることが大事じゃないかなということを思っています。

あとは、先ほども言いました話し合い活動が随分子どもたちはよくできるようになってきました。自分の考えを言葉で伝えるということがしっかりできてきました。昨年度の「授業これだけ」という中に書くことを通して考えを深めるというのが書いてあったと思いますけれども、自分の考えたこと、言葉、それから書くこと、それから効果的なプレゼンテーションとか、そういったようなことで表現していく力、これからそれをつけることも大事じゃないかなと思っています。

それから、校長会としては去年から人材育成対策部というのを設けました。校内での人材育成をどうようにしていくかということについて今後しっかり校長会でも議論していきたいというように思っているところです。

それから、不登校の子どもたちが小学校において増加しているということは大きな問題だと感じています。温かい認め合う学級づくりとか、それから関係機関の連携とか、それから分かりやすい授業とかということはもちろんなんですけれども、登校時刻がちょっと遅くなってきたとか少し表情が暗くなってきたとか、そういった早期の適切な対応というのがとても大事になってくると思っています。

小学校では、中学校と少し違うのは保護者と離れることが不安な子どもさんがいるということ。特に低学年において、そういったことがあります。そういった場合には一緒に登校していただいたりとか、子どもの不安を和らげるためにちょっといていただいて少し離れたりとかお迎えに来ていただく。それから、幼稚園とかこども園とか保育園とか、そこの連携もそういったことも考えながらやっていかないといけないなということを思っています。子どもたちにとって、学校に行ったら話せる人がいるとか居場所があるというようなことがとても大事になっているし、どの子にもそういう状況をつくってやりたいと思っています。もちろん居場所が学級であったり、それから話せる人が友達であったり担任であったりすればいいですけど、なかなかそういうわけにいかないこともあります。

小学校が中学校と違うのは学級担任制というところです。担任以外でも養護教諭とか支

援員さんとか専科とかカウンセラーとか、いろんな人が関わっているんですけど、本校では今年度から高学年で一部教科担任制というのを取り入れています。1人の担任がその学年の全てのクラスの授業を行うということで、たくさんの教員が子どもに関わるということで、子どもを多面的に見たりとか、よいところをお互いにこんなところが見られたというように伝え合うこともできますし、子どもも話ができる人が増えていくというようなこと、そしてそれがだんだんほかの人と接することも楽しいというように人間関係が広がっていったらいいなということを思っています。

それから最後に、保健室登校という言葉もありますけれども、本校ではけがをした子どもが出たり入ったりして、なかなか保健室では落ちつかないというような状況もありましたので、昨年度から先ほど言った居場所ということで、ほっとルームと名づけた部屋、校内でのフリースクール的な部屋をつくっています。ほっとルームというのは、ほっとすることと温かいという言葉から来たんですけれども、学校に来にくい子どもとかクラスに入りにくい子どもがまずそこで過ごすというようなことをして、それから担任の先生が休み時間に来たりとかクラスの友達に来て一緒に給食を食べたりとか誘って遊びに出るだとかお昼で帰るだとか、そういったようなことを少しずつしながら、学校に来たら必ずクラスに入らなくてはいけないというようなことでなくて、ちょっと居場所としてほっとできる場所をつくってやるというようなことも少しずつ進めているところです。

人と関わる力を付けていくと。コミュニケーション力だとか協調性だとか、そういったようなことがこれから求められていくのではないかと考えていますので、校長会としても重点事項として取り組んでいきたいと思えます。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

それでは、教育委員の皆さん方、ご発言をお願いいたします。どなたからでも結構ですが、石井さん、どうですか。

○石井教育委員 まずもって、今までの教育大綱を定められてからのこれまでの期間、それから今コロナウイルスで学校がない中で本当に学校の大切さとありがたさというのを一保護者として本当に感じております。心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

次期教育大綱に当たってということで、西島さんからも新しい学習指導要領を踏まえた考え方もいただいて、中学校、小学校の校長先生からもお話をいただいて一番感じたこ

とは、今まで教育大綱の中で積み上げてきた、しっかりとした基礎を今後も積み上げていくとともに、新しいものを取り込むものも必要なかなというように感じております。その中で新しいものというものが英語とかITとかという分かりやすいものだけではなくて、この偏差値に本当に全て入り込んでいくのかなというところが一番感じたところで、その偏差値のところに入れていくのであれば、目標というのは偏差値で表現されればいいかなというように思っているんですけども、そこに入らない部分はどういったものがあるのかというものを洗い出した上で、そこが必要だったら改めて定義して付け加えていくという作業が必要じゃないかなというように考えています。

個人的には、人間としてのあり方というか、大人としてのあり方というのが今後変わっていくという部分で、これまで求められていたものと違うものが多く西島さんのお話の中でも提示されていたなというように感じてまして、例えば失敗を恐れないとか、今までどちらかというと失敗を許さない減点主義というようなものもあったと思うんですけども、そういった考え方ががらっと変わってくるようなところというのはしっかり押さえて、この新しい学習指導要領の取り込みを次期教育大綱の中で是非行っていただきたいなというように感じております。

そしてもう一点は、コロナウイルスの中で不登校の方が来られるようになったというような新しい何か偶然の知見というものもコロナウイルスの中であって、そういうところを是非有効に今回のチャンスにできたらいいんじゃないかなというようにも思いますし、特にICTのところも不登校に有効じゃないかというお話もいろいろ聞いております。なので、そういったところを是非活用して、このコロナの急な変化というものを前向きにプラスに活用できないかなというように感じました。

そのICTの利用のところは、どちらかというと、これまでの教育の補足的な使い方ではなくて、もっとプラスアルファの使い方というのもかなり、STEAMというようなお話もありましたけども、あるんじゃないかなというように思ってます、あれもこれもというわけじゃないんですけども、この基礎をしっかり大事にしながら新しい学びのあり方というのを取り入れていくというのを是非お願いしたいなというように思いました。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

そのほかどうでしょうか。

○妹尾教育委員 はい、ありがとうございます。今期の大綱の実現に向けて現場の教員の

先生方が並々ならぬご尽力をされた、それが結果に現れているということで敬意と感謝を申し上げます。

その上でなんですけど、ややちょっと私は石井委員よりも悲観的なのかあれなんですけど、学力についてはほぼ到達しているということではありますけれども、問題行動の防止と解決に関しては不登校の問題が数値的に達成できていないというところ、そのあたりがどうなのかなというのがあります。あと、それ以上に先ほどもお話が出ましたけれども、新型コロナウイルス感染症の関係は今後どのような影響を及ぼすのかというのが非常に懸念して、ある意味、この感染症、言葉が適切かどうかは分からないですけども、人間疎外的なところがあるわけなんです。

人間の一番の特質というのは、やはり社会生活を営む動物であるということだと思うんですけども、そこを育むというのがまさしく学校教育、特に公教育の役割だと思うんですけども、そこが今後どうなっていくのか。今のところ幸い岡山下では新たな感染者というのが無くなって学校も再開されるということではありますけれども、今後どうなっていくのかということが非常に心配していて、先ほど校長先生のほうがおっしゃった不登校の方が登校されてるというようなのも出てきてはいるんでしょうけど、果たしてそれがどういうのかというのは今後検証していく必要もあるでしょうし、どちらかというやはりマイナスに働く影響が大きいのかなというように、不登校等に関して、という懸念を持っています。

あと、今後恐らくですけども、全世界的、全国的に経済がものすごく落ち込んでいくことが予測されるわけで、そういう意味で家庭での学習、家庭力というのか、それも今後どうなっていくのかなというのが私自身は懸念しているところです。その中で、学力の向上、問題行動の防止及び解決という、この2本の柱を維持していくということも非常に重要なのかな。守りといったらあれですけども、今後コロナ禍がどう収束していくのか、それとも二、三年、尾を引いていくのか、そのあたりも私自身もこの1年かけて考えをまとめていきたいなというように個人的には思っています。

ちょっと雑駁な感想めいたもので申し訳ないんですけども、以上です。

○市長 では、河内さん、よろしいですか。

○河内教育委員 失礼します。お二人が非常に高い知見からのお話をしてくださって、なるほどなと共感しながら聞かせていただいているところですが、私、教育現場におりました者として、少し具体的な話から入らせていただきたいと思います。

学力向上ということで、全国学力・学習状況調査の偏差値を指標にしながら、そしてそこで調査の具体的な結果を分析しながら学力向上を進められてきたと思います。私が学校におりました六、七年前になりますか、その頃はこの学力・学習状況調査を指標にするということに非常に大きなアレルギーがありました、現場のほうで。はっきり申し上げて、校長先生方の間でもこれが指標になるのかと。真の学力とは言えないんじゃないか、一部ではないかとか、それから教育の質と結果とが一致しないと。一生懸命いい教育を行っていても、必ずしも結果はよくない。それから、地域間とか学校間の序列を招くとか、いろんな意見があって、公開ということには本当に後ろ向きな状況でした。

私はこの学力・学習状況調査を使わない手はないと。教員の授業改善を図るにもいい指標になるし、それから何といても保護者に成果と課題を分かりやすく数値ではっきりと伝えるべきだと。そして、一緒になって手を携えて一緒に教育をしていくという、そこにしっかりと意義を見出して使っていこうということを申し上げてきました。まずは自分の学校から取り組んでいこうということで、職員にも熱く語ってきました。当時はほとんどの学校が対策していなかったと言い過ぎかもしれませんが、対策が不十分だったので、少し取り組めば、もう見る見るうちに成果が上がって行って、それが子どもたちにとっても教員にとってもすごく大きなやる気につながっていて、もっともっと授業改善していきたい、もっと力をつけたいという気持ちが高まっていったと思います。

このときに私は特別支援教育を基盤に置いた学校経営というのをやっていたので、決して点をしっかりとる子どもたちを鍛え上げて点数を上げていくということじゃなくて、学力に非常に自信がない子、意欲を持たない子、そういった子どもが少しでも自信を持ったり、長い間、一生懸命勉強に取り組むということをして上げていこうと。それにはどうしたらいいかということで教員同士ですごく話合いをして、具体的な手だて、もうこれがやはり一番だと思うんですね。本当に具体的にこうしよう、ああしようということを決めてやっていきました。

そのことを校長会でも、校長会のお役もいただいていたので、しっかり呼びかけたんですが、なかなか難しいものがありました。でも、今これだけ、先ほども小学校校長会長さんもそうです。中学校のほうでもこれが授業改善につながっているんだということで、大きな成果を上げてらっしゃると。ここ数年ですごく変化したのではないかなと、成果が上がったのではないかなと思っています。

これは教育委員会の事務局の方々が並々ならぬ努力をされたんじゃないかと。意識改革

というのは本当になかなか図れるものではないけれども、地道な意識改革をされていったんじゃないかということと、それから校長会なども一生懸命そういうような方向に取り組んでいかれたという成果ではないかなというように思っています。さらに、学力アセスとか「授業これだけは」とか、いろんなことでやってこられている。これはこれからも継続して、市民に分かりやすく伝えていくということをしていただきたいなというように思っています。

ちょっと長くなって申し訳ないです。不登校なんですけど、不登校はいろんな要因があって、人間関係とか学業不振とか進路の問題とか家庭環境とか、それから発達障害の二次障害とか、もうさまざま、もう一律して要因が何かということとは言えないと思うんですね。先ほど西島さんのほうからすごくいい資料をいただいて、例えば資料の16ページに学校のあり方が一元モデルから多元モデルに変化するという中の上から3つ目の「個々人の特性」に応じた教育、これこそが不登校の解決の鍵になるのではないかなというように思っています。

やはり同じ内容、これを求めていたらできない。でも、さっき門田会長さんのほうから、このコロナのお休みの間に子どもが学校へ来るようになったと。多分、みんな休んでいる、そこに罪悪感を感じてない。自分も一緒なんだと。よし、やっと学校に行けるようになった、やってみようという一つの大きな行動に勇気と決断を持って行動したんだと思うんですね。そういう小さな一人一人の勇気や決断が認められるような、もう1時間でもいい、何でもいい、そういうものが一人一人違って、目標が違って置かれていくということがすごく大事なのかなというように思っています。

I C Tなんかの先端技術を活用すれば、もう不登校はゼロになるんじゃないかなというようにも思ってますし、それぞれの特性とか、いろんなことに応じた教育を行っていく。この目をしっかり大切にしていくということかなというように感じました。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

じゃあ、片山さん、お願いします。

○片山教育委員 失礼します。私も一保護者として、これまでのこの成果に現れました、委員会の事務局の皆様と校長先生を始めとした学校の先生方のご尽力でここまでして、子どもたちのために学力そして問題行動等を悪い方向に行かない、いい方向に向かうようにしっかりと着実に力を付けてくださっていることにありがたく思います。どうもあ

りがとうございます。

私からは、一つの保護者の立場ということもすごく意識して今回いろいろ聞かせていただいたんですけども、保護者としては、先ほどの西島様からいただいた資料を見ますと、どんな力を一体子どもにこれから付けていけばいいんだろうという、すごく漠然とした、でもものすごい力を子どもに授けてやらないとこれから生き惑うんじゃないか、生きていけなくなっちゃうんじゃないのか、どうやって自立に向けていってやればいいのかというところで、また非常に他分野にわたり、英語だったり、それからICTだったり、いろんな力を付けるということに対して非常に広い視野での学び、そして学力や自分の力を付けるということについての課題が大きいなというので、一瞬ちょっと圧倒されるような感もあります。

ただ、そういったところでいろいろ考えて、ほかのこともお話も伺わせていただいたり考えたりした中で、これからまず育てていかなければならないということの大事なところで表現力ということの一つ教わったように思います。暴力のまだ十分抑制できていない面もあるというお話も結果もあるんですけども、その暴力に出るところは一つ表現力のツールの乏しさというところがあるかと思います。そういう意味では、言葉の力を付けていく。その言葉の力の背景には、先ほど出たようなコミュニケーションを生かしたような学びのシステムというのは非常に重要なんだろうなと思いました。

学校に子どもたちが帰ってくるに当たって先生たちが迎えてくださる、そういう若い先生方のお力だったり学校のお力というところで、学校というところでの集団教育の独自性という意味で直接人と関わるという場には子どもたちが向かっていけるかというところをしっかりと育てていくということは、家庭においても非常に重要だろうなというように思いました。その学校ならではの集団教育の中で育つコミュニケーション力だったり、もちろん学力もそうなんですけれども、そういった力を育てていく上で、学校現場とそれから家庭、そしてその学校と家庭がある地域も含めて、いかに子どもたちを育てていくための分担ができるかということも考えていかなければいけないのかなと思いました。

家庭でしっかりと引き受けないといけないことということもしっかりとあると思いますし、学校でだからこそ育てていただけることもあると思います。なので、そこらあたりの家庭と学校、地域の連携という中で、それぞれの役割とか子どもに向き合う力のつけ方というところの何か切り分けだったり意識化だったりということも十分しながら、連携して子どもが将来自立できる力を育てていくということが重要なのかなということの一つ思い

ました。

それからもう一点、主体的に学ぶ力というのが非常に重要だなということを思いました。先ほどオンライン授業とかインターネットを使った学習に関してドリル学習という繰り返し学習については子ども個人で取り組むこと、そして学校では仲間がいる集団だからこぞできるような話し合い活動等を中心としながら子どもの力を付けていくというお話があったかと思いますが、そういった中で子どもが自分で繰り返し学習をしていくということにおいては、主体的に取り組む力というのが必要だろうと思います。その中では、魅力的な学習形態だったり内容だったり、それから取り組む姿をしっかりと認めてもらうことというようなことも重要かと思います。

その中で、子ども自身がいろんな学びがたくさんある中での得意を伸ばしていくことができる力というのを周りでしっかりと育てていくという視点も必要かなというように思いました。その得意を伸ばすということに関しては、自分ではなかなか理解できなかったり、分からなかったりすることもあると思うんですね。自己認識というのは他者から指摘してもらって初めて、あっ、自分はこういうところが得意なのかとか、集団の中で初めて自分の不得意も分かるかもしれないけど、あっ、意外にできるかもしれないというようなことも分かったりする部分もあると思いますので、そういった意味での自己肯定感をしっかりと育てていくというのが家庭においても学校においても、そしてそこで協働しながら子どもの力として身に付けられるような関わりを持っていくということが重要なのかなという気がしました。

もう一点、その自己肯定感を持って主体的に取り組むという上では、子どもなので今回の休業期間中も自宅学習となるとなかなか継続的に取り組むということが難しく心が折れそうな部分もあるんですけども、そこで忍耐力を持って取り組めるという力も周りや支え合いながらとか友達もやってるから自分も頑張ろうとか、そういった非認知的能力と言われるような、そういう学力に直結した数値には現れにくいんだけど、その数値に現れることに向かう土台となる力という自己肯定感だったり忍耐力だったり、そういったことも家庭、学校、地域と一緒にあって個々の子どものよさを引き出すような形で育てていけたらいいのかなというように思いました。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございます。

じゃあ、西島さん、ちょっと短目をお願いします。

○西島 はい。先ほど石井委員のほうから失敗を恐れずにというお話がありましたが、恐らくこれは新しいことではなくて、今でも、例えば部活のお話とか人生相談とか子どもからあったら先生方は恐らく失敗は恐れるなというようなことをやってらっしゃると思うんですが、いかにそれを教科学習の日常の中に取り込めるかと。間違ってもいいから発言できるような学級づくりですとか何かそっちのほうにいて、学校というところはそういう自由な発想を育む場であるというように転換できるかどうかの方が不易をよりよくするということかなというように思っています。教科学習のあり方というのをもっともっと研究していかなきゃいけないなというように思っているところでございます。

以上でございます。

○市長 じゃあ、教育長。

○教育長 さまざま貴重な意見をありがとうございました。今日は最初の取り掛かりの回ということで、いろいろこれから本当に深化していかないといけないというように思っているんですが、私自身が常に頭の中にあるのは、今日我々が出している資料1の中にこれからの岡山市の学校のあるべき姿という右下のものがあると思うんですが、いつも私の中に頭にあるのは、この4つを書いてありますけども、やはり右上の教員の力量のところ、ここが一番大切なところではないかなということを思っています。学校というのが中心にありますけど、実は学校イコール私は教職員だと思っています。そこがやはり力を持たないと、どんなこともうまく進めていけないのではないかなということを改めて感じました。ありがとうございました。

○市長 いろいろな意見をありがとうございました。特にもう一度発言したいというのがあればお願いしたいと思いますが。

よろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 今、教育長から取り掛かりという話がありましたけど、第一弾だと思います。それで、私、最初の大綱がうまくいったというのは、やはり目標となるものが分かりやすかったということがあるんじゃないかなというように思ってます。そういう面では第2回目のこれで大綱づくりなんですけど、大綱だけつくるといのは何の意味もない。それを目標として、先生方を中心としてそれぞれの役割を持って、みんなが動いていくというのができて初めて旗づくりができるんじゃないかなというように思ってます。

したがって、この旗づくりといいますか、目標づくりというのは、分かりやすくなけれ

ばならないというのが1つあると思うんです。それからもう一つは、さまざまな役割がありますが、私も教育長と同じで先生がその中心にいないといけない。この先生が自分でつくった大綱だと思えるようになると一番それがいいんじゃないかなというように思っています。そういう面では、校長会での議論とか、またそれぞれ校長さんが持ち帰った学校内での議論、そういうものを積み重ねていただいて、菅野教育長、岡林教育次長を中心とする教育委員会でぐっとまとめていく。こういう当事者意識というか、それを是非お願いをしたいなというように思います。

それから、先ほど清廣さんがおっしゃった、例えば小学校の教科担任制の話だとか、さまざまな具体の取組でプラスになってることというのが学力だけじゃなくて、さまざまな面においてあるんじゃないかなというように思うんですが、それは多分、菅野さんと話すと学校によって大分特色も違うから一律にはならない。それはそういうところもあるんじゃないかと思うんですけれども、そういう何か具体のものを列記して、分かりやすく先生方に示していく。先生方も人事異動もありますし、なかなかすぐになじめないというところも、どうしていいか分からないというところもあるんだろうと思うんですが、そういう具体に学校に行って既存の先生方と一緒にになりながら、こんな制度で動いてるんだ、これがこんなに成果を上げてるんだというものが分かるような、そういう具体性があるというか、そういう大綱というのもいいんじゃないかなというように思います。

まだまだこれから1年かけて、妹尾さんがおっしゃったように新型コロナの影響なんかも分析しなきゃいけないと思いますし、いろんなことをやらなきゃならないと思うんですが、これからの岡山市の教育の分かりやすい旗づくりというのを是非ともお願いをしたいなというように思っている次第であります。今日は第1回目の議論ということで、それぞれのすばらしい視点からの指摘が出たんだろうと思いますが、これを肉付けし、いいものにしていきたいと思います。よろしくお願いを申し上げます。

それでは、本日の協議はこれまでといたします。事務局に進行を戻します。

○司会 ありがとうございました。次回の会議は改めて通知をさせていただきます。

以上で令和2年度第1回の総合教育会議を閉会します。本日はありがとうございました。

午後4時59分 閉会